

「 脱・「正常化の偏見」 」

秋田県 湯沢市立皆瀬中学校 3年 なかやま 中山 りゅうき 竜希

「土砂災害に遭遇したら、あなたはどこへ逃げますか？」  
防災学習館の職員の人が僕達に質問した。防災シアターの大型スクリーンには土砂災害の映像が映し出されていた。僕達は黙り込んでしまった。

土石流が起きたら？——土石流の映像を見ると、その流れはかなり速いことが分かる。職員の話だと、時速 20 から 40 キロぐらいだそう。土石流に巻き込まれないように逃げるには、それ以上の速さで逃げなければ助からない。しかし、それはどう考えて無理なことだ。シアターにいる皆中生はスクリーンの映像を見つめるしかなかった。どうしたらいいのだろう——みんなが答えを考えあぐねていた。室内にしばらく沈黙が続いた。すると、職員の人が、「横に逃げるんです。土石流は直線に流れます。だから横に逃げると助かる確率が高くなるのです。」と教えてくれた。この答えに僕達は深く頷いた。

秋田県にある防災学習館では色々な災害について学ぶことができる。地震体験コーナーでは東日本大震災の横揺れや阪神淡路大震災の直下型の地震を体験するコーナーがある。その他、火事を想定した煙中体験や消火器の使い方でも体験することもできる。防災に関する知識、技術、行動力を確認できる体験型の学習施設だ。

そうした防災学習の中で僕は特に土砂災害のことが印象に残った。その理由は、数々の災害の種類の中で土石流は、他と性質が違うように感じたからである。

災害はある日、突然やってくる。それはどの災害にも共通して言える。しかし、土石流は、大雨などの後に起きる災害なので、二次的な災害だと僕は思う。地震や火事などは、体や視覚でははっきりと自覚できるが、土石流は発生するまで気配を消している。言い換えれば「沈黙の災害」と言えるのかもしれない。だからこそ土石流は油断ができない災害と言える。

しかし、そんな土石流の危険性はあまり注目されていないような気がする。実際、僕もそうだったからである。

一昨年、僕の住んでいる皆瀬地区は大雨により、土石流のおそれがあるとして、避難所が設置された。この時、僕は初めて土石流の危険性が自分の身のまわりにもあることを実感した。それというのも、僕は土石流は自分の身近に起きるものとしてとらえていなかったからである。それどころか、あくまでも他の都道府県でおきるものだと変な思いこみをしていたようにもある。しかし、この避難勧告によって、僕は改めて土石流の怖さを知った。

その後、僕は土石流のことについて調べた。すると、土砂災害警戒地区は、67 万件に及ぶことが分かった。僕はその数字に驚いた。慌てて自分の住んでいる地区を検索してみると、自分の住んでいる地区も該当していた。しかも広範囲に及んでいる。僕は言葉を失った。

「正常化の偏見」という言葉を気象官の方から教えてもらったことがある。人間は危険に対して「自分だけは大丈夫」と考えてしまう傾向があるそうだ。僕の土砂災害に対するとらえ方はまさにその通りだった。いったい何を根拠に僕は「自分の住んでいる地区は大丈夫」と思っていたのだろう。そしてそうした油断が実は怖いのではないかと僕は思った。

先日、先生から 2 学期の P T A に親子で一緒に防災について考える講習会を行うことを教えてもらった。講習会の内容は、自分の住んでいる地区ごとに分かれ、居住区の危険箇所を確認することと、親子で各地区でもし避難所を開設するとしたら、どんなことをするといいいのかを話し合う、というものだった。

この話を聞いた時、僕はこうした機会をもつことは大切だと思った。そうでないと、災害について親子で話し合うことはないように思う。また、それと同時に、災害時における中学生の役割を確認することは必要だと思った。それというのも、僕達の住んでいる地区は少子高齢化が進み、いざとなったら僕達中学生も避難所でみんなのために動かなければいけない場面が出てくると思うからだ。そのためにも、こうした機会をチャンスととらえ、防災についてたくさんの人と確認しておく必要があると思う。先日、修英高校の生徒さんが、幼稚園の子ども達合同で避難訓練を行っていたが、こうした活動は「いざ」という時につながっていくと思う。

自分だけは大丈夫——そんな「正常化の偏見」をもつことなく、普段から防災について意識して生活をしていきたい。

防災館での土砂災害の映像は僕にとって防災についての意識改革のきっかけとなった。この学びを今後も大切にしていきたい。